

おすすめ図書紹介

アイネクライネ ナハトムジーク

あなたが思う理想の出会いとは

登場人物が老若男女様々な組み合わせで関係を結び、あの人とこの人が、過去と現在、未来において、あんなところでこんなふう繋がる。少しずつでも、人は誰かと影響し合っています。出会うこと、そして誰かと関わり合うこと。「アイネクライネ」から始まり散らばる多くの点が、「ナハトムジーク」へと繋がっていく物語です。いろんな性格の人々が、ありのままの姿で不器用に進んでいく姿を愛おしく感じてきます。



アイネクライネ
ナハトムジーク
伊坂 幸太郎 著
幻冬舎文庫

友達、恋人、チームメイト、同僚…人生は「出会い」と「別れ」の繰り返しだけど、思いも寄らぬところでハッと驚くような繋がりがあるかもしれないし、あったかもしれない。あの時、あの場所ですれ違ったのが君でよかったと思える出会い。劇的ではない、何気ない出会いを大切にしたいと思いました。明日がきっと楽しくなる——本当にそう思わせてくれる一冊です。

体育学部4年 馬場 菜緒

火車

「火車【かしゃ】生前に悪事をした亡者のをせて地獄に運ぶという。」

この一文から始まるミステリー小説ですが、読み終わった後にこの題名の意味が腑に落ちました。

物語は、一人の女性の失踪を主人公が捜索する中で、その女性の過去を追い探すというミステリーです。主人公視点で淡々と描写されているため、主人公の傍で見守っている様な感覚でテンポ良く読めます。刑事事件の様なトリックに驚かされるのではなく、事件が起きた過程に注目されているので、作中の様々な表現から人物の葛藤や心情が分かるのも魅力の一つです。



火車
宮部 みゆき 著

作中での時代は違いますが、ローン地獄に陥る事など自分とは無縁だと思っていたものを身近に感じました。ミステリー小説としても、社会派の小説としても私の中でかなり印象に残る作品のひとつです。登場人物の心情をポイントに是非読んでみてください。

体育学部4年 吉田 侑希

お探し物は図書室まで

この本は5つの話、5人の主人公からなる連作短編集です。小学校に隣接するコミュニティーハウスの中の小さな図書室。仕事や人生に悩むそれぞれの主人公たちは、ふとしたきっかけでそこを訪れます。レファレンスカウンターで司書に探している本のイメージを伝え、渡されたのは本のリストと羊毛フェルトでできた「付録」。リストの最後には関係なさそうな一冊の本もあり、主人公たちは戸惑いますが、やがてそれらに導かれるように自分の思いや、近くにいってくれた大切な存在に気づき、少しずつ進み始めます。



お探し物は図書室まで
青山 美智子 著
ポプラ社

ほんの少しのきっかけ、それは小さいものかもしれませんが、でもその小さな一歩が人生を変えるきっかけになるかもしれない。やさしく背中を押してくれるような一冊です。

図書館 司書 大浦 京子



特別展示のお知らせ

「学長の本棚」

金子一秀学長推薦図書です。
本を通して学長の人柄や研究に触れてみませんか。



ブックリストはこちら→

「パリオリンピック特集」

2024年パリ大会開幕に合わせ、
オリンピック・パラリンピックに
関する図書を集めました。



ブックリストはこちら→

図書館ホームページのお知らせ

開館カレンダーや図書館に関するお知らせ、蔵書検索などを掲載しています。

図書館ホームページは
こちら→



開館カレンダーは
こちら→



編集・発行：東京女子体育大学・東京女子体育短期大学
図書館運営委員会
東京都国立市富士見台4-30-1 TEL.042-572-4131
2024年11月発行



The web of our life is of a mingled yarn,
good and ill together.

William Shakespeare, *All's Well That Ends Well*

人生は、善と悪とをより合わせた糸で編んだ網なのだ。
W. シェイクスピア『終わりよければすべてよし』
(松岡和子 訳)



新・立身出世論 ～生きてゆく力～

今回のテーマは「生きる」について考えてみるということですが、書籍のタイトルを見る限り、このテーマとどんな関係があるのかと思う方が多いと思います。実はこの本の中に「生きてゆく力」という章があり、たいへん興味深い内容となっているので取り上げました。その章を要約すると、人間、疲れてもう全く動けないという状態でも、目の前に恐怖の物体が現れればすぐに逃げ出すことがあるという事例が挙げられています。このことは、自分で限界と思っている、実はそうではなく、人間の可能性は計り知れないということを示していると思えることができます。この章に記載されている例は、身体面(体力面)での話ですが、こ

のことは精神面においてもいえるのではないかということが、この本を読んで得た最大の収穫です。

この本は出世する方法を学ぶのではなく、力強く「生きる」ことに繋がる多くの方法を教えてくれる本といえます。すなわちこの本を読むと、少し大袈裟にいうと、どんなことがあっても精神力で乗り切れると思えるようになってくる不思議な本です。

野外運動研究室 本田 宗洋



新・立身出世論
～四 その二
生きてゆく力～
戸川行男 著

学校で役立つ臨床心理学 —小説で考える子どものこころ

生きている途中で答えあわせ

この本は、教科書に採用されることが多い作家たちの40作品をとりあげ、さまざまな場面(恋愛、家族、部活動などの人間関係)における登場人物について、トラウマ、愛着形成、自己効力、合理化、レッテル貼りなど、心理学の立場から分析して解説したものです。

小説は本来、教科書のために、ましてやテストのために書かれたものではありません。

小説(文学)に登場する人物は、今よりも生きる選択肢が少ない時代

に、くすんだ輝きをもつ凡人で、順境より逆境を、常識ではなく非常識を、マジョリティよりもマイノリティを選び取りながら、作品世界を駆け抜けていきます。その姿は、あなたやあなたの知り合いにどこか似ているから、読んでいて面白いのかもしれない。

現代文の授業では、あなたの自由な読み方を封印していませんか？

この本のタイトルに「学校で役立つ」とありますが、正直なところ、成績向上や査考対策のための本だとは断言できません。しかし、あなたが生きている途中で出遭った難問の答え合わせができる本として推薦します。

特別活動研究室 小西 悦子



学校で役立つ臨床心理学—小説で考える子どものこころ
丸山 広人 編著
角川学芸出版

「生きる」について 考えてみる

さて、少し難しい話かもしれませんが、『君たちはどう生きるか』という映画が話題になっています。その「生きる」ということを考えたとき、「生きる」ということは「誕生」と「死」という、相反することの「あいだ」にある出来事ということに気づきます。その「あいだ」の人生を「どう生きるか」ということが、人間にとって極めて重要なことなのです。そこでは、「生きる」自分の人生を描いて、それを全うするため自らが試行錯誤し正解を見つけていかなければなりません。(金子一秀学長 令和5年度卒業式 式辞より)

怠ける権利

私の「レジャー・レクリエーション概論」という授業では、「レジャー」=「遊び」の反対語として「働く」ということについて考えます。そしてこの授業では、皆さんが卒業した後の人生を、「働く」だけで埋め尽くさないでほしいと伝えています。

この授業で紹介するP.ラファルグの『怠ける権利』という本では、「働く」ということを以下のように表現します。

若くてたくましく、敏捷で健康で、くたくのない陽気な若者を「資本」はつかまえ、製造工場や織物工場、鉱山に何千人となく監禁する。そこで彼らを、大窯でふんだんに燃やす炭のように消費し、…彼らの生命力を木石に注ぎ込むのだ。彼らが自

炎上CMでよみとく ジェンダー論

生き方や価値観の多様性と「炎上CM」

あるファッションビルのCMで、パンツスタイルの女性社員が、先輩の男性社員によって花柄スカートに巻き髪の若い女性社員と比較され、おしゃれをしななければならないというものがありましたが、これが「炎上」騒ぎとなりました。男性から女性向けられた視線について、そんな余計なお世話だと多くの人が感じたのです。ある石鹸会社のCMでは、家で子どもの誕生祝いをする約束を妻としたの

に、夫は会社の後輩をなぐさめる方を優先し飲んで帰るという内容で、「炎上」しました。夫が性別役割分業の上に居直っているように受け取られたのです。おむつのCMで、お母さんの育児の苦勞に寄り添っているようでいて、お父さんがほとんど登場しないものについては、ワンオペ育児を美化するのかと「炎上」しました。CMの内容が現代社会における生き方や価値観の多様性に配慮できていなかったり、一昔前の価値観のままであったりすると、「炎上」が起きます。この本では、ジェンダー研究で有名な社会学者が、様々な炎上CMを分類し、「炎上」という現象の本質に迫ります。

教育心理研究室 大石 千歳



炎上CMでよみとくジェンダー論
瀬地山角 著
光文社新書

由の身にされた時は、擦り切れこわされて、歳でもないのに老けてしまっている。

この記述を見ると、会社によっていつも元氣な皆さんの生命力が引っこ抜かれ、それが会社の利益を生む代わりに、皆さんが消耗きった状態で捨てられていく姿をイメージしてしまいます。

「働く」ことだけが「生きる」ことではありません。いつも心に「遊び」を持ってくださいね。

スポーツ社会学研究室 笹生 心太



怠ける権利
ポール・ラファルグ 著
平凡社